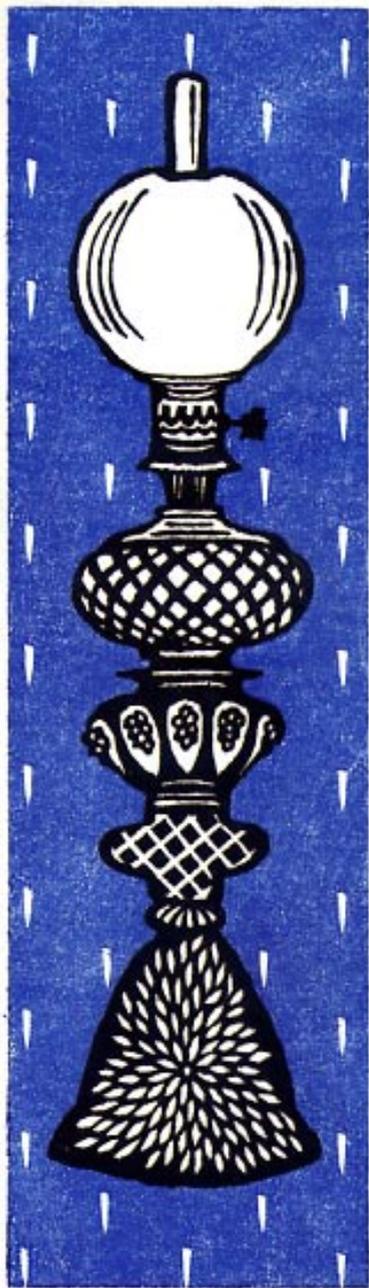


春燈

九月号

9

September 2008



春燈主宰退任のご挨拶

このたび体調不調の兆しを覚えましたので、突然でございますが、主宰を退任させて頂きました。今後体調をくずしてからでは諸事混乱を来しますので、この機会と存じそうさせて頂きます。約五年半の間、みな様のご協力によりその任を全うさせていただきましたこと誠に有難くこの段厚く御礼申し上げます。

平成二十年八月

鈴木 榮子

主宰就任のご挨拶

鈴木榮子主宰には、健康上の理由から、このたび春燈主宰の座を勇退されることになり、後継主宰に、安立公彦が推挙されました。

榮子主宰は、平成十五年四月から五年半の間、「春燈」を統轄され、その間「春燈60周年記念号」の刊行など、春燈俳句史に貴重な実績を残されました。こののちは後進の範となる作品のご提示を祈念致します。

新主宰として、向後は、万太郎・敦・櫻桃子・榮子と継承されてきた「春燈の抒情」の火を守り育て、同時に時代の新しみをとり入れた作品を視野に入れつつ勤める所存です。

皆さま方のご協力とご精進を切にお願い申し上げます。

平成二十年八月

安立公彦

安住 敦の句

ランプ売るひとつつランプを霧にともし

『古暦』昭和二十二年

歳時記でこの句を見つけた時、私は一枚の絵をみている心地がした。霧の立ちこめたロシアの街角で、老人がランプを売っている、荷台にひとつ灯したランプのあたりが、老人をあたたく照らしている。

この話、先生には告げずじまいだったが、仮に「あゝあれね、銀座の路地裏で拾った句だよ」と答が返ったとしても、そう簡単にぬりかえられるものではない。

菊地瑩子

安住 敦の句

秋風や麴麴の袋の巴里の地図

『午前午後』昭和四十六年

何とお洒落な句なのでしょう。紳士の抱えている袋からバケツトが覗いています。秋の風がコートの裾をゆらせ家路を急かせています。まるで映画の一場面を観るようです。秋風がよい雰囲気を演出しています。西洋文化の浸透してきた当時の世相も思い起されます。

この度平成十二年春燈俳句会発行の『安住敦全句集』を読み、安住敦先生にお会い出来た思いです。

横田 初美

主宰の句

安立公彦

青空をもてこころ足る父の日や

灯を消して夏野八方わが胸に

風立つや四囲に息継ぎ青田道

十葉にふれし掌拭かず古墳径

遠雷や幾たび蕪辞を連ね来し



舌頭千転

宮地れい子

字の撥ねを大事としたる筆始

美辞麗句ならべて老いの初便り

穴出でし蛇一生を棒にふる

舌頭千転して山桜の一句

土佐に生れ土佐より知らず後の雛

後期高齢

伊東湘三

夕薄暑迎へ頼みし掌の電話

西瓜喰ふ家系図持たぬ江戸つ子で

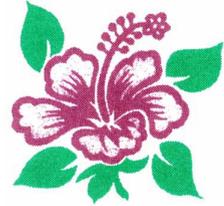
後期高齢既に半ばや谷戸青葉

たらちねの壮なころや夏祭

その朝の清掃奉仕広島忌

当 月 集

鈴木 榮子選



○ 河本由紀子

十五にして天稟溢る緑雨かな（川合玉堂二句）

温顔に秘めし炯眼青嵐

いざごさを一抜けた日や梅雨晴間

愛も恋も心ふふみて滴れり

汗粲々安宅を打てる大鼓

○ 久本久美子

門楼に立つや緑の京の町

花橘遠くにほへり紫宸殿

神苑にモネの睡蓮目覚めけり

走り梅雨三十六峰けぶりけり

風鈴や折ぎに書かれしおぼんざい

○ 松波とよ子

暑に抗し神将在す無骨顔

山寺や門徒こぞりて夏安居

黒衣行脚の果てや夏灯

爽やかに微笑木喰像の四圍

堂涼し子安観音抱きし子

○ 金子 輝

マンションに指圧処や梅雨兆す

掌に重き家庭医学書梅雨の冷

梅雨晴間焼き立てパンを抱へ来る

読みさしの「蟹工船」に蜘蛛奔る

待つことに耐へ青春のソーダ水

○ 後藤眞由美

たまゆらの風織りなすや虹の帯

半夏雨ころのどこか軋みを取り

でで虫や負ひし荷物置きどころ

蜘蛛の囲やあしたの色の水の上

夕闇や梅雨の潮騒早言葉

春燈の句

鈴木 榮子選

手のひらに天使の羽根や昼寝覚

東京 神山 志堂

五月田や磐梯山を余すなく

あるじなき画室の気韻かへでの実

対話するカヌーは櫂を交へけり

子子を見てみて親に整されけり

托鉢僧鰻屋の前足早に

茄子漬の色に夫婦の諍へり

強面の漢飼ひたる目高かな

玄関に漢訪ひくる夏嵐

昨夜の雨一気にあがり登山靴

七変化きのふの色と今日の彩

メトロより出でし漢の手に日傘

小港の午後のまどろみ枇杷は実に

神奈川 葦原 葭切

海の色横して昏れ待つ七変化

むくむくと桶の膨らむ梅雨晴間

鮎釣においでと葦に誘はれて

街の音減りゆく梅雨の走りかな

枇杷は実に添寝の母のまどろみて

冷奴ぼろりと本音洩らしけり

丹念に路地裏を掃く薄暑かな

鴨の子の減りみて哀れ世の荒び

傾きし峡の畑やらつきよ掘る

山開き母なる山の香に痴れる

夕立中列を乱さぬ障害児

衿元の白き舞妓や半夏生

滴りの間に滴りのいのち生む

東京 塚本みのる



神奈川 府川 昭子

東京 増田 大

余言

鈴木 榮子

子子を見てみて親に螫されけり

懸林喜代次

子子を見ていたらその親の蚊に螫されてしまった、というのですが、親が心配して人間を追払うために螫した訳でもないでしょう。一種の遊びで子子を見ていたら、蚊に螫されたというとそのまま何の面白味もないでしょうが、その親に螫された—というところにおかしみがあります。

蚊という手で叩けば他愛もなく防げるものの哀れさを、そのままにも出来ないので、作者は敢てその親に螫されたと自嘲的に、俳諧化したところにこの句の面白さがあります。

滴りの間に滴りのいのち生む

塚本 みの

權六つすいつと滑らす水馬

〃

季節が移ると作者の眼に触れるものがぐっと変って、夏の自然が句材になります。

一句目も、—滴りの間に滴りのいのち—などに思いがゆくのは俳人独特の思いでしょうし、また自然と向き合っている俳人の思いでもあるでしょう。この作者の「水馬」の句も、生きものの生態を詠まれているのになぜか「權六つ」が隅田川辺のボートレースにまで思いが飛びました。

瑠璃とかげ王家の墓に尾を残し

竹内 慶子

海外吟なのでしょう。とかげは異様な形、色彩を持っているのに、そう怖がられないのは、特に仇もないし、小さい。この句もそうです。小ものとして墓などのお守りの役をもっていたのかと、作者は思ったのでしょうか。

しかも、このとかげには瑠璃という華やかさがあり、王家に仕える運命を持っていたのでしょうか。せめてその思いを「尾を残し」と作者は詠みとったのでしょうか。